Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo

座談会

留学生、学環を語る

2008年12月10日@情報学環・福武ホール1階　学環コモンズ

英語だけで受講でき、学位が取得できるアジア情報社会コース（ITASIA）が2008年10月からスタートした。留学生の増加に伴い留学生支援室もオープンし、情報学環・学際情報学府は留学生をサポートするシステムを強化しているところである。今日は学生・留学生委員長の山本隆一先生を囲み、留学生の方々に学環学府に来て良かったこと、困っていること、今望んでいることなど自由に語ってもらった。

参加者:

司会・山本隆一先生（学生・留学生委員会委員長、以下Y）
陳嵩さん（社会情報学コース修士1年、以下C）
Alexandra Hambletonさん（文化・人間情報学コース修士2年、以下A）
李夢鈺さん（文化・人間情報学コース修士2年、以下L）
Enrique Gonzalezさん（学際理数情報学コース修士1年、以下E）
Adiyan Mujibiyaさん（総合分析情報学コース修士1年、以下Ad）

第一印象は？

山本隆一先生

Y いま学環・学府の留学生は正規生の20%を占めています。ITASIAはすべて留学生ですし、研究生もほとんどが留学生という環境です。来ていただいた留学生の方が、よりよい環境で学ぶことができる「魅力ある学府」にするために、今日は日々感じていることを率直に語っていただきたいと思います。学環・学府は「文理融合」を掲げていることもあって、今日いらっしゃる皆さんが学府にいらした理由も様々だと思いますが、実際入学して第一印象はいかがでしたか?

E まず感じたことは、指導教員や研究室の先輩がとても優しく接してくれるということです。研究生活だけではなく、家を借りるときや、日本での日々の生活で困ったときなども先生や研究室の皆さんが助けてくれました。

A 私も同じです。私は家を探すときに、「外国人お断り」と書かれていないにもかかわらず、30件断られました（笑）。それから、私たちは日本語のメールを読むことだけでも一苦労で、ある書類をどの部署へ届ければいいかなど、手続きでわかりにくいところがありますが、研究室の皆さんはそういうときもすぐに助けてくれます。また学務係の皆さんには、いつも様々な面でフレキシブルに対応していただいて感謝しております。

Ad 私も裏表の激しい日本の文化に最初慣れなかったのですが、研究室の方々はそういうこともなく、とてもサポートしてくれました。

教育カリキュラムはどうでしょうか？

Y みなさんの第一印象を聞くと、それぞれの研究室を中心に「学府」をとてもファミリアな場所に感じているようですね。それでは、少し研究室を越えた大きな視点から「学環・学府」について、特に教育カリキュラムについては何か思うことがありますか?

エンリケさん

E 日本語がもっともっとうまくなりたいのですが、修士課程に入学してからは「基礎」や「研究法」などの必修科目でたくさんの単位をとらなければならず、時間が重なってしまって、日本語の授業に出られなくなってしまったことが残念です。またカリキュラムを説明した冊子がほとんどの場合、日本語版しかないので、日本へ来たばかりの留学生にはつらいかもしれません。

L そのことと少し関わりますが、学府の講義名は英語に訳すととても難しく、私はヨーロッパの大学院へ進学したいと思っているのですが、何を学んできたかを書類で示すことがとても厳しい状況にあります。講義名の英訳にはサブタイトルが必要だと思います。それから、文系と理系で違いはあると思いますが、必修科目がとても狭く特化している講義もあるので、もうすこしイントロダクティブな講義も必要ではないでしょうか?

李さん

A 私もそう思います。元々学府はいろいろな専攻の方々がいらっしゃるので、入門という授業があると、留学生だけではなく日本人の学生も助かるのではないでしょうか。それから配布資料がない口頭だけの講義の場合、日本語がわかっていないのでわからないのか、それとも内容がわかっていないのか、どっちだかわからないときがあります。そうしたことを確認せずに講義をすすめていく先生もいらっしゃるので、留学生が多く在籍する環境でしたら、できるだけ配布資料などがあれば親切だと思います。

アディヤンさん

Ad 総合分析情報学コース研究法は、各先生方のこれまでの研究をオムニバス方式で紹介する形式をとっています。大学院は基礎というよりはいろいろなネットワークや視野を広げる場としてあると考えていますので、私はとても満足しております。ただ「文系と理系の融合」ということでいえば、総合分析情報学コースの私たちは一番離れたアネックスにいることもあって、あまり実感できません。もう少し文理の交流があるといいのではないでしょうか。

施設は使いやすいでしょうか？

Y 今年の春に福武ホールが完成し、学習やミーティングなど自由に利用できる学環コモンズもでき、学環の施設は充実してきました。そうした施設を使う際に改善して欲しい点などありますか？

C 本館に私物を置くことができるロッカーがあって助かっているのですが、本館は夜早い時間に閉まってしまい、自分専用のロッカーが開けられなくなってしまいます。閉館を遅くしてほしいと思っています。

E または、学環コモンズは夜遅くまで開いているので、こっちにも専用のロッカー等があると便利ですね。

アレックスさん

A 学環の施設だけに限ったことではないのですが、それぞれの施設でそれぞれの手続きを経ないといけないのはとても不便に感じられます。例えば、学環コモンズでインターネットを使用する際は学環コモンズの手続きが必要ですし、学内の他の場所で利用する際は情報基盤センターのIDが必要になります。一つのIDでどこでも自由に使えた方が研究の効率もあがると思います。また、「情報」という名がついているにも関わらず、未だに手書きで手続きをしないといけない場合が多いことも疑問です。

E 施設ということでは、宿舎がもっとあるといいです。先ほども言いましたが、私たち外国人が日本で家を探すということは大変なことです。これから学環・学府が多くの留学生を迎えるということであるならば、そうしたことも考えたほうがいいと思います。

サポートは十分ですか？

Y 施設や宿舎のことについては、学環・学府だけではなく、大学全体として考えていかなければならない点も多くあると思いますね。それでは次にソフトな面をお聞きしたいのですが、現在、留学生の皆さんへのサポートということについてはチューター制度があり、今年の秋には留学生支援室が開室しました。支援室はできて間もなく、これから充実させていかなければならないところもあると思います。皆さんから何か要望があればお聞かせください。

E チューター制度はあってよかったです。

A 私もチューター制度はとても助かったのですが、中にはチューターに連絡をとっても会えない、またはちゃんとチューターが働いてくれないという声も耳にします。留学生支援室に関して言えば、開設された当初は、「留学生」と「日本人学生」というふうに普通の生徒から排除された気分になりましたが（笑）、支援室のサポートには感謝しております。ただ、まだできて間もないので大変ということはよくわかるのですが、期日直前に提出しなければならない書類などがメールで送られたりするのは、少し困ってしまうことがあります。

L 留学生は帰国することもありますので、提出物のスケジュールに少し余裕があると助かります。

陳さん

C 私は留学生支援室はとても素晴らしい空間だと思いますが、透明な壁は「外から見られる」という感じがしてしまい、少し居づらいかもしれません。

E そうですね。私は東京大学の本部棟にある留学生支援室でプライベートな相談をすることがありますが、学府の留学生支援室のようにガラス張りだとそういう相談はちょっとできません。

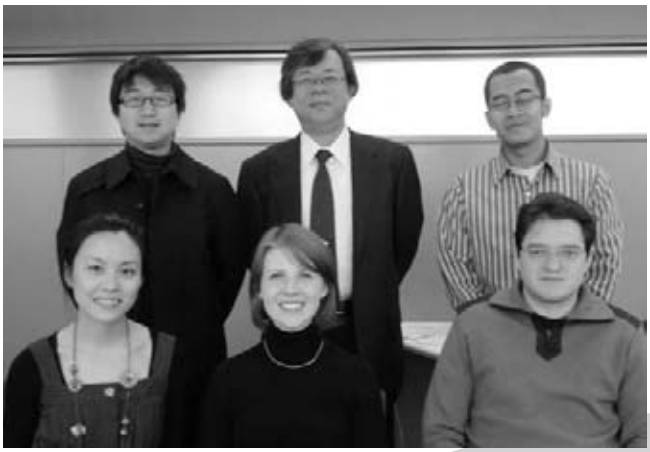
その他の希望は？

Y そのほかに留学生の皆さんが学環・学府に望むことはありますか？

E これから私は就職活動をする予定なのですが、日本の就職活動は、研究をすすめながら就職活動を行うという、留学生にとっては特殊な状況だと思います。留学生向けの就職活動のパンフレットやセミナーなどがあれば重宝するのではないでしょうか。また、今回のこの会は自分の意見を自由に交わすことができるいい機会となりましたが、こうした留学生の意見を聞く機会が定期的にあるといいと思います。その他に、身分を明かせない相談などもあると思いますから、匿名で投稿できるシステムなども必要だと思います。

Ad 留学生ひとりひとりがもっている情報を共有できる場があればよいと思います。例えば住む場所についてなどプライベートなことから、研究のことまでお互いが知りえるようなオンラインの掲示板や、留学生のためのソーシャル・ネットワーキング・サービスのなどがあってもいいのではないでしょうか。

Y なるほど、今日はとても有益な意見を聞くことができました。対応すべきところは、これからしっかり対応して、「魅力ある学府」を作っていきたいと思います。今日は貴重な意見を本当にありがとうございました。


参加くださった皆さん、ありがとうございました

制作展【iii Exhibition 10】開催

12月4日から9日にかけて、学生によるメディアアート制作展【iii Exhibition10】が開催された。2004年から始まった制作展は、今回で10回目となる。本展は、科学技術と融合した芸術の新しい表現を学生の手で発信することを目的に、学際情報学府と情報学環コンテンツ創造科学産学連携教育プログラムの合併授業の一環として行われている。また、過去の制作展の作品は、昨年海外で複数の招待展示を行っており、その質も評価されている。

記念すべき第10回を迎えた今回の展示は「Designing Technology for [ ]」というテーマのもとに、出展作品数が20作品と、前回に引き続き規模の大きな展示となった。工学部2号館中庭では、過去9回の制作展を振り返る大々的なアーカイブコーナーを設け、また、学生が外部のアーティストとともに、作品を用いたライブパフォーマンスを行うなど、作品面以外でも充実した展示となり、700名以上と多くの来場者を迎えた。詳細は制作展Webサイト（http://i3e.iii.u-tokyo.ac.jp/）にて。（原島・苗村研M1・和田拓朗）

COEユビキタス空間情報シンポジウム開催

10月24日、本学において、情報学環21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」第18回シンポジウムが開催された。今回は、最近の地理空間情報への社会的注目を背景に、「ユビキタスと空間情報」と題して、70名が参加し盛大に行われた。COE拠点リーダーである坂村健教授による開会挨拶の後、鈴木宏・新潟大学大学院医歯学総合研究科教授による「公衆衛生分野におけるGISによる空間情報解析」、原田豊・科学警察研究所犯罪行動科学部長による「犯罪研究と時空間情報」、神山和夫・NPO法人バードリサーチ研究員による「バードウォッチングとデータベース」の各講演があった。パネルディスカッションでは、岡部篤行・工学系研究科・空間情報科学研究センター教授も迎え、ユビキタスと空間情報学の連携について議論が交わされた。とくに、「空間」というキーワードで医療・犯罪・自然という異分野がつながる点が指摘され、インフラとして空間情報を整備することの重要性が再認識された。（准教授・石川徹）

資料センター展示室オープン

情報学環附属社会情報研究資料センター（センター長:馬場章教授）は、新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」の成果の一環として、2008年10月1日より「展示室」を情報学環本館1階にリニューアルオープンした。展示室は21世紀COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」（拠点リーダー:坂村健教授）のユビキタステクノロジーとデジタルアーカイブ研究の成果を取り込み、ユビキタスコミュニケータによる詳細な展示解説を体験できるシステムを構築している。

初回の展示では「UT3 情報学環収蔵資料[第一幕] 小野秀雄コレクションと坪井家寄託資料」と題し、情報学環の源流のひとつである新聞研究所初代所長の小野秀雄氏より寄贈された新聞錦絵やかわら版のコレクションのほか、アーカイブ化が進められている東京帝国大学時代の人類学者、坪井正五郎博士に関する寄託資料など、本邦初公開の資料を見ることができる。（開室時間:平日9:30～17:00）。（特任助教・添野勉）

日韓シンポジウム開催

11月21日と22日、韓国・ソウル大学において、「日韓シンポジウム」が開催された。本シンポジウムは、旧・社会情報研究所の時代からソウル大学との間で毎年開かれている伝統的な会議であり、今年は「Digital Convergence and Institutional/Cultural Changes of Public Broadcasting」と題して、日本・韓国・中国等から数多くの研究者・学生が参加して、盛大に行われた。情報学環からは、吉見俊哉教授、Jason Karlin准教授、石川徹准教授がそれぞれの研究等について発表を行い、また、今回の参加者募集に応え審査を経て選ばれた十名を超える学府大学院生も英語による発表・討論に参加した。レセプションでは各国の研究者・学生が和やかに語らい、互いに親睦を深めるとともに、有意義な意見交換の場となった。（准教授・石川徹）

今年は中国、台湾、香港からの出席者もあり、これまで以上に盛会に終わった

台湾・国立政治大学と国際学術交流協定締結

情報学環は、12月10日に国立政治大学傳播学院と国際学術交流協定を締結した。国立政治大学は、台湾のメディア・コミュニケーション研究分野においてもっとも歴史があり、最高の評価を受けている研究・教育拠点のひとつである。東アジアに新たな研究拠点が増え、学環の益々活発な学術交流が期待される。

鍾蔚文院長と吉見俊哉学環長

第2回学環顧問会議開催

12月17日、情報学環顧問会議が福武ホールラーニングスタジオにて開催された。顧問委員には今年新たに角川グループホールディングス代表取締役兼CEOの角川歴彦氏のご参加をいただき、長尾真国立国会図書館長を座長に、学環側から現状のご説明のあと、顧問の方々からご感想やご意見、ご提案をいただいた。2回目となった今回は、この1年の学環の変化についての評価もいただくことができ、大変有意義な会議となった。

読売・東大 連続シンポ開催

東京大学大学院情報学環と読売新聞東京本社は、9月から12月にかけて、情報化時代におけるメディアの未来を考える3回の連続シンポジウムを開催した。いずれの回も会場は満員の聴衆で埋まった。

第1回は、ジャーナリストの立花隆氏がパピルス、印刷本、磁気テープ、CD-ROM、HDにいたる目まぐるしい媒体の変遷をふりかえりつつ、人類共通の財産としての情報のありかたを展望。第2回は、長尾真国立国会図書館長が基調講演し、電子化、デジタル化の激しいうねりによって変化する時代に、「知のアーカイブ」であり続けた図書館の行方を考えた。最終回は、滝鼻卓雄読売新聞東京本社会長と立花隆氏の話をもとに、新聞の未来や、データベースのあるべき姿を展望した。情報学環からは第1回に北田暁大准教授が、第3回に林香里准教授がパネリストとして参加。総合司会はいずれの回も吉見俊哉学環長が務めた。

第1回：情報の海～マストからの眺め（9月20日）
第2回：情報の海～沈まぬ「図書館」丸（11月1日）
第3回：情報の海～「新聞」という船（12月13日）

盛況！学環ホームカミングデイ開催

学環教員の「平均顔」は？

11月15日、本学において「第7回東京大学ホームカミングデイ」が開催され、情報学環においても「情報学環・学際情報学府ホームカミングデイ」と題して講演会、懇親パーティが開かれた（於・福武ホール）。今年は、学際情報学府および教育部研究生の同窓生・現役学生をはじめ、情報学環教職員など合計166名が来場し、盛大に開催された。吉見俊哉学環長の開会挨拶の後、原島博教授、姜尚中教授により、それぞれ、「サイエンスプロデュース－新しい科学はいかにして生みだされるのか？」、「恐慌とはどんなものなのか－国家破綻のアルゼンチン取材から」と題して講演があった。引き続き開かれた懇親パーティにおいては、第2代学環長である原島教授への感謝の意を込めて、学府1期生からの花束贈呈とともに、学環ゆかりの人々の「平均顔」の展示があり、また有志による就職相談会も開かれるなど、終始和気あいあいとした雰囲気の中、盛況のうちに幕を閉じた。（准教授・石川徹）

参加者多数を集めたトークイベント「建築の際」

情報学環・学際情報学府主催の建築系連続トークイベント「建築の際」全5回のうち、第1回が11月28日に、第2回が12月12日に、福武ラーニングシアターで開催され、それぞれ立見を含む250名、300名を超える参加者を集めた。本企画は、学際情報学府と工学系研究科の大学院生が、建築家×他ジャンルの専門家×情報学環教員のゲストの選定、事前取材、プログラム作成、司会を務めている。

第1回「都市の際」は、建築家の安藤忠雄氏（東京大学特別栄誉教授）による講演「都市の現在」の後、吉見俊哉学環長と大学院生を交え、オリンピック、環境問題、国際社会をめぐり、活発な「対話」がなされた。

第2回「アジアの際」は、建築家の隈研吾氏、建築家・建築史家の藤森照信教授（東京大学生産技術研究所教授）、姜尚中教授による講演の後、秋菊姫さん（D3・吉見研）と村松一さん（D3・藤森研）による司会のもと、アジアの空間、身体、伝統のほか、建築と政治に関する刺激的な議論が繰り広げられた。（助教・南後由和）

3/20、21「MELL EXPO 2009」開催！

今春もやります！「メル・プラッツ」では、2008年4月の第1回につづき、内外からメディア表現、リテラシーの実践・研究を集結した「MELL EXPO（メル・エキスポ）2009」を開催します。詳しくは、下記Webページをご参照ください。（准教授・水越伸）

■日程：2009年3月20日（金・祝）、21日（土）
■会場：東京大学大学院情報学環・福武ホール
http://www.mellplatz.com/

受賞報告

■日本科学教育学会論文賞
●ベネッセ先端教育技術学講座（BEAT）の研究プロジェクトの成果として発表された論文「おやこdeサイエンス：家庭における科学の学習環境の充実を支援する教育プログラム」（『科学教育学研究』第30巻第3号掲載）が、第32回年会において論文賞を受賞。（08.8.23）

■日本社会情報学会（JASI）2008年度大学院学位論文賞
●並木志乃さん（交流研究員・須藤研）の博論「地域コミュニケーションを円滑にする評価指標の開発と評価」が博士論文奨励賞を受賞。また、学際情報学府優秀修士論文にも選ばれた木村裕美子さん（D1・須藤研）の修論「Three Transitional States and Innovation Policies: ICT, Nanotechnology and Biotechnology」が修士論文賞を受賞。（08.9.13）

■グッドデザイン賞
●（財）日本デザイン産業振興会が運営し、わが国唯一の総合的デザイン評価・推奨制度である「グッドデザイン賞」の2008年度受賞作品に苗村研究室の「可視光通信プロジェクタ（PVLC projector）」と「両面タッチ入力可能な透明インタラクティブディスプレイ（LimpiDual Touch）」が選出。また、情報学環・福武ホールも公共施設・建築領域で同賞を受賞。（08.10.8）

■日本教育工学会論文賞
●ベネッセ先端教育技術学講座（BEAT）の研究プロジェクトの成果として発表された論文「データマイニングを活用した学習方略フィードバックシステムの開発」（『日本教育工学会論文誌』第31巻第3号掲載）が、第24回全国大会において論文賞を受賞。（08.10.12）

■計測自動制御学会システムインテグレーション部門貢献表彰
●鈴木高宏准教授がSI2007プログラム委員長として表彰受賞。（08.12.6）

BOOK

「Digitally Archiving Cultural Objects」

池内克史　宮崎大輔 編 / Springer

文部科学省LPプロジェクト「大型有形文化財のモデル化のためのソフトウエア開発」プロジェクトなどで開発してきた大型有形文化財のモデル化に関する形状データや光学データの処理ソフトウエア、開発段階で題材として取り上げたカンボジアのアンコール遺跡・バイヨン寺院のデジタルデータ、ならびにそれらのデジタルデータから得られた成果などを収録。

「Creative Marketing for New Product and New Business Development」

石川昭　辻本篤 編 / World Scientific Pub Co Inc.

事業開発や製品開発の方法論を、理論的側面や事例研究に求めながらも、それらを思考するための根源的“情報”を探索することを重要視しながら検討を進めた。開発プロジェクトの設計・運用、大ヒットした日本コカコーラの『からだ巡茶TM』のマーケティング、感性工学を応用したリコメンデーション・エンジン・『教えて！家電』の事業化へのプロセス、ロボット開発の現状と課題など文系・理系の垣根を越えた研究者・開発者の成果が示されている。

「アフォーダンスの視点から乳幼児の育ちを考察」

佐々木正人 編著 / 小学館

2人の男児が3歳になるまでの日常生活を940シーン・計16時間収録した映像データベース「動くあかちゃん事典」DVDが特別付録。何気ない毎日に潜む「発達」という出来事の迫力に驚かされる。「あかちゃんプロジェクト（代表：佐々木正人）」の集大成である。書籍では、無藤隆氏（発達心理学）、深澤直人氏（デザイナー）、國吉康夫氏（ロボット工学）の各氏がこの事典の魅力を語る。

【東京大学大学院情報学環・学際情報学府】

学 環 学 府

Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

The University of Tokyo

number.
24

東京大学大学院情報学環・学際情報学府　〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1　e-mail : news@iii.u-tokyo.ac.jp　発行：2009年2月　編集委員：鈴木高宏・林 香里・前波奈保子・福 博充
http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/